

○小林裕美、水野信之、石井正光

(大阪市立大学医学部皮膚科)

高橋邦明 (大東市・高橋皮膚科)

山本 巖 (大阪市・山本内科)

〔目的〕アトピー性皮膚炎の難治化は近年、社会問題ともなり、西洋医学的治療のみでは難治する症例もかなりの数にのぼる。私どもは以前より山本 巖博士に小児アトピー性皮膚炎の補中益気湯療法の御指導を受け、先がけて使用しその有効性を実証してきた。その経緯については1989年に西日本皮膚 51: 1003-1013 に報告した。それ以後、乳幼児はもちろん成人においても駆瘀血剤、清熱剤以外に補中益気湯を併用する頻度が増えてきた。今回、これら併用例における臨床効果と、最近の難治アトピー性皮膚炎の病態の一傾向を明らかにするため、過去3年間の補中益気湯併用例についてレトロスペクティブに検討した。

〔方法〕1996年から1998年に小林外来を受診し、写真撮影によりその後の経過が明らかになるように努めた患者132名を対象とし、長期にわたる症状を5段階法で評価し統計をとった。パッチテストなどで検索したアレルゲンの除去を行い軽快する例は除外した。漢方薬を併用する前に西洋医学的治療と食養生などの生活指導のみの経過観察期間を設け、軽快しない例に漢方薬を併用することとした。3段階以上の改善または6ヶ月以上皮疹なしを著効、2段階を有効とし、6ヶ月以内にステロイド内服を要するか悪化の波をきたした例は無効例に算入した。

〔結果〕132名中35例は漢方薬を併用する前に軽快するなどの漢方非併用例であった。食養生を含めた東西併用医学により治療した97例中61例に補中益気湯を併用していた。補中益気湯併用例の治療効果判定の結果、著効9例、有効19例、やや有効28例、無効4例、悪化1例であった。補中益気湯併用理由として易感染性や心身の衰弱状態などがあげられた。

〔結論〕近年の難治アトピー性皮膚炎患者の中に、補中益気湯併用が有用な一群が存在し、補中益気湯のようなサイトカインネットワークに対しても調節的作用を有する薬剤の必要性が示唆された。